

清朝の眺望3

アヘン戦争以後のアジアの歴史を大まかに見れば、欧米列強のアジア進出に対する、アジア諸国の反撃の歴史である。それを、別の角度から見れば、白色人種の支配に対する、有色人種による、自由のための戦いの歴史であるとも言える。日本の日露戦争の勝利は、当時発明されたばかりの映画によって、その海戦の様子などが、アジアの人びとに知らされ、大喝采を博したという。この戦争での日本の勝利は、歴史上初めて、白人に対して有色人種が勝利した出来事だったのである。それは、有色人種に自信と希望を与えたという。

欧米列強は15世紀末から、アメリカ大陸やアフリカ大陸の各地を植民地にし、続いて南アジア、東南アジアをつぎつぎと植民化し、しだいに東アジアへと進出して来た。

1511年マラッカ、今のマレーシア（ポルトガル領に）

1571年フィリピン（スペイン領に）

1898年フィリピン（アメリカ領に）

1700年代半ばインドネシア（オランダ領に）

1765年イギリス、インドの植民化を始める。

1819年シンガポール（イギリス領に）

1826年〜1886年ビルマ（イギリス領）

1862年〜1884年ベトナム（フランス領）

1863年カンボジア（フランス領に）

1895年マレーシア（イギリス領に）

1899年ラオス（フランス領に）

1909年マレー（イギリス領に）

この間、アジアで植民地にならなかったのは、タイと日本だけである。そして、大まかに見れば、日本はアジア解放の頭目のようにも見えるが、事實は、狡猾な侵略者であり、アジアで唯一、植民地を持った国である。

さて、西洋列強のアジア諸国への進攻について、人種的な見方だけでなく、その他にも、さまざまな見方がある。例えば、キリスト教文明の進出、資本主義（帝国主義）の侵略、産業革命による機械文明の征服、民主主義とヨーロッパ政治体制の強制、自由貿易のための進出などなど。しかし、西洋列強は侵略者ではあるが、たんなる暴力（軍事力）だけで世界を支配することはできない。彼らには、中国などの旧世界にはない新鮮な魅力があったと思われる。それは、近代文明（産業革命文明）という新しい風であった。

1861年、咸豊帝が30歳で没し、4歳の**同治帝が即位**した。同治帝は、咸豊帝の第2夫人の西太后の子である。

咸豊帝は死の前に、8人の大臣に、幼い同治帝を補佐するよう遺詔を残していたが、西太后は、皇后（東太后）恭親王奕訢（同治帝の叔父）と組んでクーデターを起し、8人の大臣を粛清し、恭親王と共に清朝の実権を握った。（辛酉政変）以後、**西太后の垂簾聴政**が始まった。



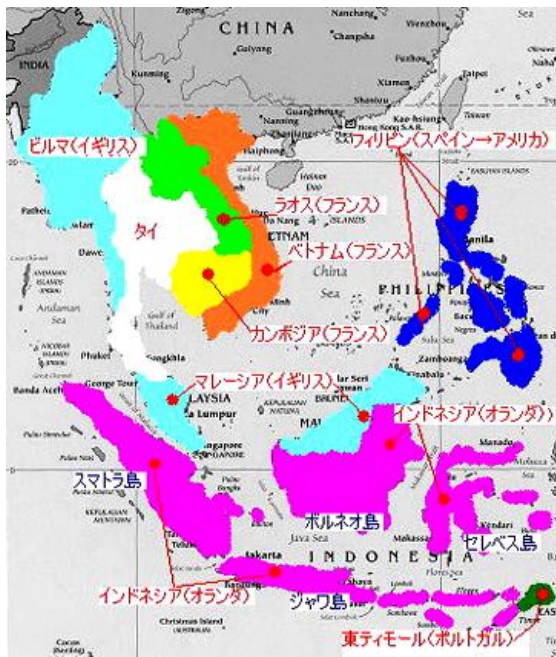
第10代皇帝 同治帝



西太后 (1835~1908)



恭親王奕訢 (1833~1898)



欧米列強による主な植民地

欧米列強の進攻によって、中国では、西洋の近代文化受容派と、中国の伝統を守る西洋文化否定派とが交互に立ち現れた。

1861年（咸豊11）恭親王によって、外交と洋務のための官庁である**總理各國事務衙門**（略して**總理衙門**、総署などと言う）が設立された。

1864年（同治3）漢人の軍閥である**曾国藩**の湘軍や**李鴻章**の淮軍の力で、太平天国の乱が平定され、西洋諸国との争いもなく、ひさしぶりに国内に平和がおとずれた。この期間を、「**同治の中興**」と呼ぶ。

太平天国の乱が平定されると、湘軍は解散されたが、李鴻章は、ひきつづき国内の反乱討伐に従事し、しだいに兵権を掌握し、彼を頭とする**北洋軍閥**が成立した。

同治中興の新政の実現には、恭親王と李鴻章の力が大きかった。

彼らは西洋文化を理解し、その輸入に尽力した。曾国藩や李鴻章の提案で、

上海・蘇州・安慶などに官営の武器製造所が、福州には造船所がつくられた。

これらの工場では、兵器だけでなく、製鉄や書籍の翻訳出版まで行なった。

さらに李鴻章は、海岸行路の発展を見越して、政府の資本で招商局（汽船会社）を設立した。

アヘン戦争以降、交通線の大変革が起こり、それまで、大運河の沿線で栄えた蘇州などの都市が衰え、天津・

上海・広東などの海港が発展した。しだいに運河沿線は不景気になり、失業者があふれ、その結果、排外的な感情がふくらんでいった。また、1865年（同治4）、イギリス人によって、北京郊外に敷設された中国で最初の

鉄道が、住民の反対により撤去された。その後、上海・吳淞間に開通された鉄道も、民衆の反対で廃線になった

（1877年・光緒3）。しかし、李鴻章は、北京北方の炭鉱から石炭を運ぶために、馬車を走らすと偽って、鉄

道を敷設し、汽車を走らせた。この頃、中国で、はじめて機関車も製造された。

政府は、外交官養成のため、1862年（同治元）同文館を設立し、英語・ロシア語・フランス語や数学・自

然科学・商学を教えた。さらに、李鴻章らの提案により、上海・広東にも学校が設立され、西洋の文化を急いで

吸収しようとした。また、1872年にはアメリカに留学生を派遣し、つづいてドイツ・イギリスにも派遣した。

上海などに造られた**租界**は、国際都市となり、西洋と中国との文化的な窓口となった。

世界の中の中国の位置を、ようやく理解しはじめた中国は、外交官を欧米に派遣し、欧米列強も北京に公使を

駐在させた。しかし、伝統派の反対も強く、民衆によるキリスト教迫害運動（**教案**）が毎年のように各地で起こ

った。

1875年（同治14）同治帝が19歳で病死すると、西太后は、多くの反対を斥けて、同治帝の従弟（西太后の

妹の子）、3歳の**光緒帝**を即位させ、後見人となった。同治帝の皇后（20歳）を幽閉し殺害したと伝えられる。

1881年（光緒7）東太后が突然死した（45歳）。脳卒中といわれるが、真相は不明。

朝廷は暗雲の下にあったが、李鴻章ら洋務派官僚の、欧米に習った、近代的経済活動で、資源や交通などが開発

されていたが、しかし、西洋列強との対等な関係を強いられた清国は、面目丸潰れで、周辺国との関係も断た

れ、周辺国は西洋列強の植民地となっていた。

1883年（光緒9）フランスが中国の保護国（朝貢国）である越南（ベトナム）を占領した。

1884年（光緒10）中国、越南へ軍を派遣し、**清仏戦争**始まる。

1885年（光緒11）中国はフランスに敗北し、越南はフランスの

保護国になった。恭親王は敗北の責任を西太后に追及され、失脚。

東太后が死に、恭親王が除かれ、西太后が清朝の最高権力者に。

1887年（光緒12）フランス領インドシナ成立。現在のベトナム、

ラオス、カンボジアを合わせた地域。1954年まで支配された。



第11代皇帝 光緒帝



李鴻章 (1823~1901)

同治年間に新疆のイスラム教徒が反乱をおこしたが、左宗棠を派遣して1878年（光緒4）に平定した。この内乱のどさくさに、ロシアがイリ地方を占領。1881年（光緒7）清朝はロシアと**イリ条約**を締結し領土の一部を失った。

1871年（同治10）李鴻章らの尽力により**清日修好条規**が天津で締結された。この条約は日中ともに、外国と結んだ、初めての対等条約であった。日本を属国と考えていた中国にとっては屈辱的な条約であったようだ。1873年（明治6）外務卿副島種臣によって批准され発効した。両国間で琉球帰属問題がでたが、清国には、不満があっても、もはや、領土を主張する力は残っていなかったようだ。

1875年（明治8）江華島事件がおこった。1876年（光緒2）日本が朝鮮の永安城を占領、李氏朝鮮と不平等条約である**江華条約（日朝修好条規）**を締結。朝鮮は、あらかじめ中国の同意をえて、独立国のようにふるまった。李鴻章は、中国が国際紛争にまきこまれるのをさけるために黙認したという。その後、朝鮮は、同様の条約を西洋列強と結ぶことになり、結果的に朝鮮は、日本の手によって開国させられたのである。

1884年（光緒10）12月、開化派がクーデターを起し、日本の支援で新政府樹立を宣言したが、清軍に攻められクーデター派は敗退、日本軍も撤退、清国に支援された守旧派が勝利し、1885年4月、伊藤博文と李鴻章が会見して**天津条約**を締結、両国とも撤兵した。1860年代から朝鮮では政治的な混乱がつづき、各地で農民の蜂起がおきていた。ついに1894年（光緒20）全国的な内乱である**東学党の乱（甲午農民戦争）**がおこり、朝鮮の閔氏政権は乱鎮圧のために、清国に援軍を要請、天津条約にもとづき、日本は邦人保護の名目でだちに派兵、清軍と日本軍が漢城（ソウル）近郊で対峙した。閔氏政権は慌てて反乱を収束し、日清両国に撤兵を申し入れたが、両国は拒否。8月1日、両国は宣戦布告し**日清戦争**が勃発した。この戦争は、朝鮮半島の支配権をめぐる、日朝の戦争であった。日本軍は朝鮮を占領し、李鴻章の北洋艦隊を撃滅、中国に侵攻した。清国は惨敗。

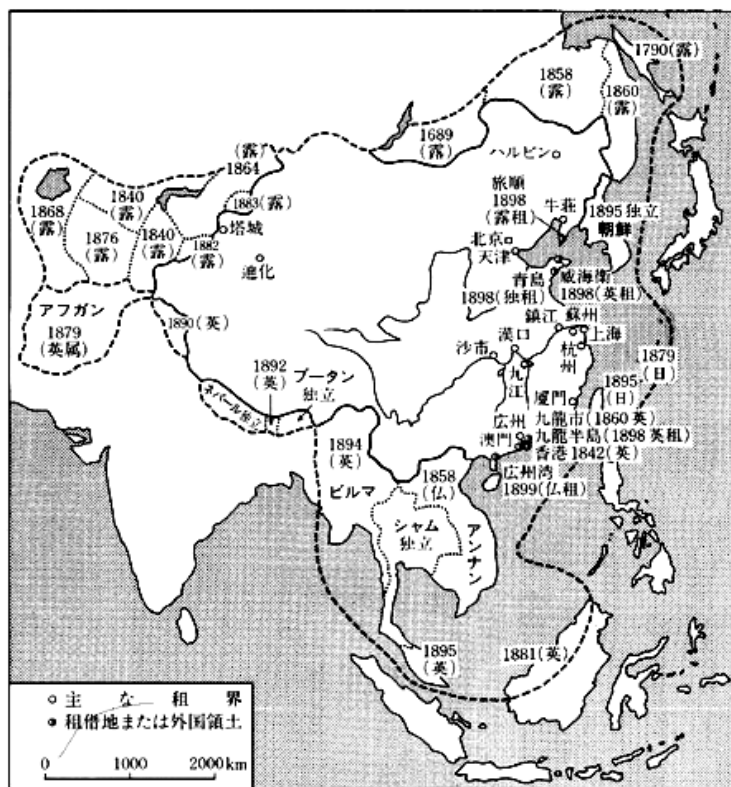
1895年（明治28）3月、李鴻章と伊藤博文が下関で会見、**「下関条約」**を締結。清国は、多額の賠償金を支払い、台湾・澎湖島・遼東半島を譲渡。直後にロシア・ドイツ・フランス三国の干渉で、遼東半島を返還した。

日清戦争の敗北は、小国日本に敗北したこと、朝鮮が独立国になったこと、台湾が割譲されたことなどによって、中国の知識人に大きな衝撃をあたえ、はじめて彼らに、民族的危機を自覚させた。また、第2次アヘン戦争の敗北以後、西太后や李鴻章のすすめてきた洋務運動（「中体西用」という考え方）の失敗をも意味していた。

日本は、それまで中国文化を畏敬していたが、この戦争に勝利してからは、中国を蔑視し、日本を先進国だとうぬぼれるようになり、帝国主義路線を選び、昭和20年の敗戦まで中国侵略戦争にのめりこんでゆく。

西洋列強は、小国日本に敗れた中国を馬鹿にして、ますます過大な要求をしだし、中国は半植民地と化してゆく。ロシアは遼東半島を租借し、満洲、朝鮮に進出。ドイツは青島を租借し、山東省横断の鉄道敷設権を獲得。ロシアはさらに旅順・大連を租借地とし、鉄道の支線延長の権利を得た。イギリスは山東の威海衛を、フランスは広州湾を**租借地**とした。

また、上海租界など、外国租界が拡張され独立国のように充実した。日本が上海に租界を獲得し、工場の建設や生産加工業が公認されたことにより、諸外国も同様に公認された。



中国人から見た、19世紀末の租界・租借地・外国領土

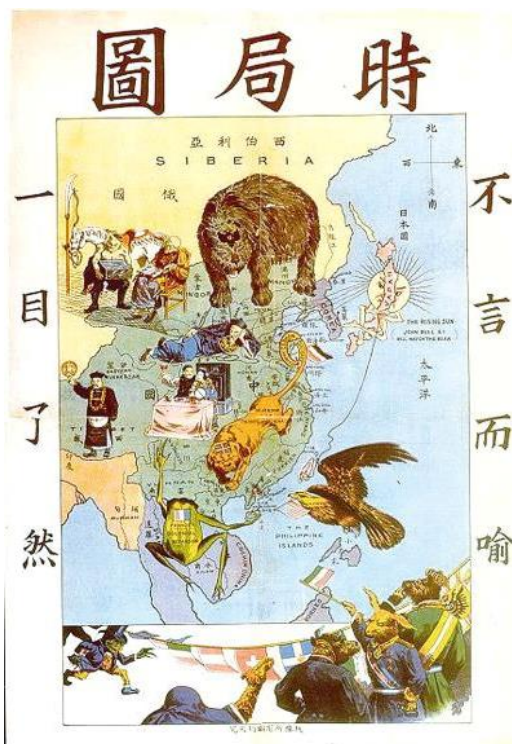
1889年（光緒15）光緒帝が成人し親政を始めると、西太后は、表向きは政權を返し、頤和園に退いた。

その後、日清戦争に敗れ、李鴻章は一時失脚するが、西太后の力で、すぐに復権し、1896年（光緒22）6月、ロシアとの交渉に当たったが、高額の賄賂を受け取り露清密約を結び、三国干渉の見返りとして、満州におけるロシアの権益を拡大させた。

また、失脚していた恭親王も敗戦後復職した。

帝国主義列強に侵略され、辱められ、追いつめられた、瀕死の中国人の前に、二つの道が拓けてきた。一つは、康有為や梁啓超らによる改良主義の道である（**変法自強運動**）。もう一つは、孫文らによる革命の道である。

清国では、日清戦争の敗北の当事者である西太后と李鴻章への不満が噴出してきた。彼らに反対する官僚たちは、皇帝を擁護し、光緒帝と軍機大臣の翁同龢の下に集まり、日本に倣って、ヨーロッパ文化の根本的受容による大改革（変法自強運動）を唱える康有為一派と協力して改革を実行した。（1898年・戊戌の年・光緒24）光緒帝は、6月から9月までの100日間に改革を行なうように命令したが、混乱をまねいただけで改革は失敗した。（**百日変法**）光緒帝はじやまな西太后を幽閉しようとして、袁世凱と密議したが、袁世凱が裏切り、西太后に密謀をつげたため、光緒帝は捕らえられ紫禁城の一角に幽閉された。親政を許していた西太后は、ふたたび政務をとることになった。改革派は反逆者として処刑され、康有為と梁啓超は海外に亡命した。（**戊戌の政変**）恭親王は、日清戦争敗戦後復職していたが、戊戌の政変の直前に病死し、西太后の独裁がはじまった。



謝纘泰「時局圖」1899年ころ

中国人による最初の風刺漫画。日本で発行された。列強が中国を狙っている。熊（ロシア）、虎（イギリス）、蛙（フランス）、鷲（アメリカ）、日本の太陽から、紐が台湾と福建に伸びている



康有為

光緒帝と康有為の新法運動が失敗すると、国粹論者が勢いづいた。また、1899年（光緒25）には、山東省で義和団という農村の自衛集団がおこった。彼らは「扶清滅洋」をスローガンにかかげ、国粹的な政治権力と結んで勢力を拡大した。西太后は、ひそかに義和団を後援して、外人を襲撃させた。1900年（光緒26）6月、北京の外国公使館区域を攻撃させ、包囲させた。列強諸国は連合軍をつくり、救援のため北京にむかった。清朝は諸外国に宣戦布告した（**義和団の乱・北清事変**ともいう）。八国（日・英・露・米・独・仏・伊・オーストリア）の連合軍が北京にせまると、西太后は光緒帝をつれて西安に逃げ、連合軍は8月北京を占領した。10月以降、李鴻章は全権大臣として、講和会議にのぞみ、1901年（光緒27）9月、**辛丑条約**（北京議定書）を締結し戦争は一応終結した。李鴻章は、11月病死した。1901年8月、清朝は一変して、義和団を反乱軍とした。1902年1月、西太后は北京にもどり、排外主義を改めて、康有為らの戊戌変法を手本とした清末新政（光緒新政）をはじめた。その主な改革は、立憲君主制への移行、新軍の建設、科挙の廃止（1904年・光緒30）などである。



義和団の鉄道破壊

この戦争の結果、中国は半植民地となり、莫大な賠償金を支払うための増税で、民衆の不満は清朝に向けられるようになった。北京・天津における外国駐屯軍の承認（日本も北京に駐屯軍をおいた）。民衆は清朝に失望し、孫文たち革命派を応援するようになり、また、袁世凱の力が増し、北洋軍閥が誕生した。

列強連合軍は、一年間ほどの北京占領中、国宝級文物や貴重な文書の掠奪と詐取と破壊をほしきままにし、それらの多くが国外に流出した。その結果、皮肉なことに、中国美術の価値と、それへの関心が世界的に広まった。1900年、ロシアは、混乱に乗じて満州一帯を占領。日本は朝鮮での権益喪失の危機を感じ、イギリスの支援をうけ、ロシアに抗議したが、ロシアは受け付けなかった。1902年1月30日、日英同盟締結。1904年2月8日、**日露戦争**開戦。主戦場は南満洲と朝鮮半島。1905年9月5日、日露は、アメリカのポーツマス近郊でポーツマス条約を締結し、終戦となった。勝利した日本は、樺太島の南半分を獲得し、朝鮮半島、南満洲での権益を確保した。ロシアは極東への侵略をあきらめ、バルカンへの進攻へと方向転換し、第一次世界大戦へと突き進むことになった。仲介役のアメリカは、満洲に進出しようと企んだがうまくいかなかった。

孫文は1894年ハワイで興中会を結成し、翌年香港にも広め、

広東で蜂起を計画したが失敗し、日本に逃亡した。

孫文は康有為の改良主義とは違って、

西洋流の革命思想によって、

中国を救おうと考え、

1905年8月、日本で、

中国同盟会を組織した。



中国同盟会成立大会



孫文

1908年（光緒34）11月14日、何者かにより光緒帝が毒殺された（37歳）。

犯人は不明。翌日、西太后が死んだ（73歳）。西太后は死ぬ前に、

3歳の**溥儀**を宣統帝とし、溥儀の父の醇親王（光緒帝の弟）を摂政王にするように言い残していた。12月2日、第12代皇帝・宣統帝即位。

1909年（宣統1）醇親王は北洋大臣の**袁世凱**の殺害を計画したが、

はたせず、袁世凱は失脚して蟄居させられた。

1911年（宣統3）10月10、武昌（今の武漢）で革命軍の反乱が起こり、

辛亥革命が勃発した。反乱はまたたくまに、全国にひろがり、

1912年1月1日、南京に臨時政府が樹立され、孫文が臨時大總統にえらばれた。

ここに、共和制国家の**中華民国**が成立した。

このころ、北洋軍閥の首領であった袁世凱が反乱鎮圧の名目で、復帰。袁世凱は、復帰の条件として、内閣総理大臣の地位と醇親王の退位などを清朝に要求し、それを受け入れさせ、朝廷の全権をにぎった。

ところが、革命軍が一時劣勢になった時、袁世凱は孫文と密約をむすび、清朝を脅迫し、皇帝の退位を迫った。宣統帝の安全を保障する条件で、すべてを袁世凱にまかせて宣統帝は退位し、**清朝は滅亡**した。

秦の始皇帝くらい、二千数百年つづいてきた専制王朝に終止符がうたれた。

孫文は袁世凱との密約にしたがって、臨時大總統を辞職、南京政府は解消され、3月、袁世凱が臨時大總統になり、北京に臨時政府がおかれた。



第12代皇帝溥儀



醇親王



袁世凱 1908年頃



上海租界 1920年



趙之謙 1829年（道光9）～1884年（光緒10）清末の書画篆刻の大家。

字は益甫、30歳ころからは撫叔。号は冷君、思悲翁、梅庵、悲庵、悲盦、愍寮、晩年は無悶、など。堂号は二金蝶堂、苦兼堂。浙江省紹興の出身。豪商の家に生まれた。家には蔵書が多く、幼い頃には充分学問ができたが、13歳のとき、喘息の父の看病疲れで母が病死。翌年、兄が訴訟に敗れ、一家は破産する。17歳ころから沈復繁に訓詁学と金石学を学んだらしい。18歳のとき范敬玉と結婚。売芸生活。24歳のとき父が死ぬ。25歳のとき杭州の浙江按察使（省の司法長官）繆梓に文才を認められ、その幕下へ。ここで、政治について研鑽を積んだ。1856年27歳のとき、太平天国軍と戦うため清軍に入る。1859年（咸豊9）に郷試に合格。1860年、繆梓、太平天国軍と戦い戦死。趙之謙は福建省を放浪。1861年（咸豊11）32歳のとき避難先で妻と娘が病死。乱により紹興の家も焼失し、福州へ避難。号の冷君を悲盦と改めた。1862年（同治元年）末、会試受験のため北京へ行く。北京では金石学に打ち込んだ。塾の講師や書画篆刻を売って生計をたてた。1864年（同治3）35歳から無悶と号するようになった。同年『補寰宇訪碑録』五巻と附編完成。この著録の過程で、彼は、大量の北魏の碑刻に出合い眼が開かれていった。この年、泰州の吳熙載を訪ね、その業績を讀んでいる。1865年、『六朝別字記』が完成。このころが、彼の書の技術や創作が最も充実した時期といわれる。1866年37歳から1871年まで書画を売りながら北京と江南を行き来し、会試を4回受けるも落第し、科挙をあきらめる。1870年41歳のとき、杭州で何紹基と会う。1872年43歳のとき江西へ赴任。巡撫の劉坤一は趙之謙の才能を認め、『江西通志』の編纂を依頼した。1873年44歳、陳氏と再婚する。1874年45歳のとき息子寿侃が生まれた。1877年『江西通志』百八十巻が完成する。1878年（光緒4）49歳のとき鄱陽県令として赴任。翌年、鄱陽県令を去り、南昌へ。1881年52歳、奉新県令となる。1883年、54歳のとき娘寿玉うまれる。1884年55歳、南城に赴任。3月、妻が死ぬ。彼は県令となつてから政務に専念し、書画制作の余裕もなく10月南城の官舎で、過労がたたたり病死した（55歳）。

篆刻作品

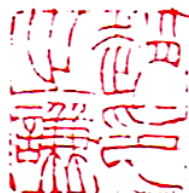


「鄭齋金石」
1863年（同治2）

鄭道昭の拓本を入手し、その書斎を「鄭齋」と名づけた沈樹鏞に依頼されて刻したもの。



「鄭齋所藏」
戦国時代の貨幣に倣って刻した印。



「趙之謙印」
側款に、丁敬、鄧完白より優れている、と刻し、得意になっている。



「靈壽華館」



側款に、漢の「開通褒斜道」に倣って刻されている。沈樹鏞のため刻した印。



「漢石經室」
1863年（同治2）
沈樹鏞の書斎の室名。



「松江沈樹鏞放藏印記」
1863年（同治2）
秦の詔版や漢の鐙器の字に倣って刻した印。



「壽如金石佳且好兮」
側款に「石刻漢鏡銘に倣って刻したもの、丁敬らにはできない」と刻している。

趙之謙は、はじめ、浙派の丁敬・黃易らを手本とし、のち、鄧派（新徽派）の鄧石如を模範として学び、両派の良いところ吸収して、最後に趙派（新浙派）を樹立した。27～28歳頃、鄧石如を通して、漢印・鍾銘を取り入れ、さらに、秦の權量銘・詔板・漢碑篆額・泉布・瓦磚などの篆書を研究し印の文字にとり入れた。彼は先人や古い作品を模範としながらも、それらにとらわれることがなかった。深い心と、澄んだ心が、刻字に現れるといわれる。彼は心光と眼光とをそなえた人であった、と賢人が伝えている。



趙之謙 篆書「說文解字叙四屏」1867年（同治6）38歳

「于時大漢聖德 熙明承天稽唐 敷崇殷中遐邇 被澤渥衍沛口 廣業甄
傲學士 知方探噴索隱 厥誼可傳粵在 永元困頓之口 孟口之月朔日
甲申口口口說 文解字叙」

趙之謙は、秦漢の石刻から篆書と八分隸を
臨書し、篆隸の意で楷書を書いた。また、楷
書は北朝の石刻、鄭道昭、瘞鶴銘、石門頌な
どを臨書した。さらに、王羲之の集字聖教序、
蘭亭序、鍾繇の薦季直表、李邕の法華寺碑、
李陽冰の篆書など、法帖や唐碑まで臨書し広
く学んだ跡が残されている。

包世臣は、鄧石如の筆法から、「逆入平出」
の書法を発見したが、趙之謙は、包世臣の書
法に、独自の解釈を加え、逆押しの筆法を考
案し、その法を楷行草篆隸のすべてに用いた。
したがって、逆入平出の筆法は、鄧石如、
包世臣、趙之謙と微妙に異なっているものと
想われる。

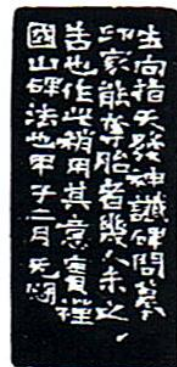
趙之謙が若い頃、郷試には顔法でなければならなかったため、習慣として、彼は顔真卿の書法を学んだと思わ
れる。20歳前までは、「顔氏家廟碑」を一日に500字も習っていたという。その後、阮元の「南北書派論」や
包世臣の書論や鄧石如の影響を受け、顔法から離れ、北碑に熱中、北京時代には金石学のうちこみ、北魏の書を
学ぶようになった。吳熙載や何紹基にも出会い、深い影響を受けたと思われる。趙之謙の書は、37歳頃大きく変
化したようだ。それは、篆刻が完成した頃である。篆隸や北魏の楷書の研究が進むにしたがって、彼の書は少し
ずつ変化し、最後に、「北魏書」と呼ばれる独自の新書風を創造した。

書作品

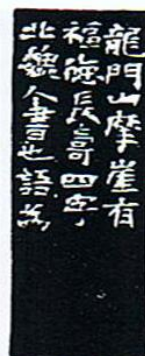
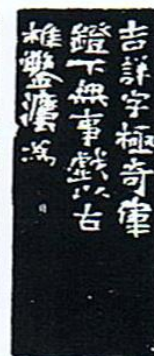
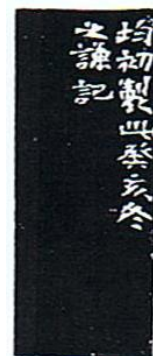
「朱志復字子澤之印信」
1864年（同治3）



「福德長寿」
1863年（同治2）



側款：吳の「天發神識碑」
の意をとって刻したもの
で、実際は「禪国山碑」
の法を用いた、と言っ
ている。



側款：龍門山の摩崖に北魏の人が
書いた「福德長寿四字」があるの
に倣って、古い刀法を用い、沈樹
鏞のために刻したもの。

趙之謙の篆刻創作の絶頂期は30代半ば
（1863年）だといわれ、44歳以降、篆
刻をやめている。趙之謙は、さまざまな篆
書や北魏の書風まで印にとり入れて、刻入
する書体を拡大した。すでに、側款には北
魏の書の影響が見られる。
吳熙載と趙之謙は「吳趙」と称され、今
も、篆刻界の最高峰といわれている。
※彼は自分の芸術を「天七人三」と評し、理想
の境地である「天五人五」に到らねばなら
ないと言っているが、篆刻は、すでに「天五人五」
で完璧だといっている。それに対して、吳熙載
の篆刻は「天一一人九」だと評している。
彼の篆刻は、吳昌碩や齊白石だけでな
く、日本の篆刻界にも大きな影響を与え
た。※印譜には『二金蝶堂印譜』などがある。
篆刻は、金石学が寸分の小宇宙に結晶し
たものとも言える。そして、それは、毛筆
による表現から刻線表現への進化でもあ
り、書の再発見でもあった。



「之」



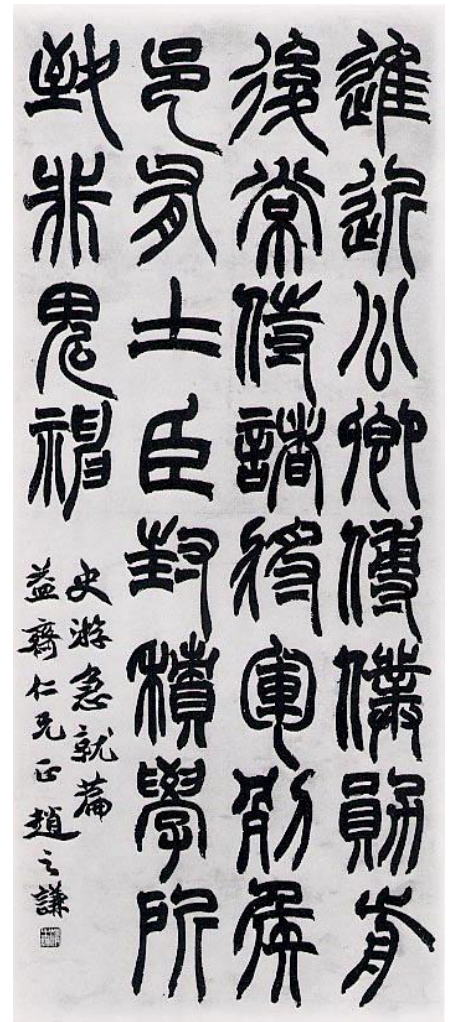
「下」



「天」



趙之謙「三略・八屏」の第1屏
1878年（光緒4）49歳



趙之謙「史游・急就篇」紙本

112.4×46.4 cm 北京故宮博物院藏

漢の史游の文字教科書「急就篇」を篆書で書いたもの。鄧石如の影響と北魏の筆意がある。制作年不詳（38歳頃？）。

「進近公卿傳什勛，前後常侍諸將軍。列侯邑有土臣封，積學所致非鬼神。」



「憂」

※彼の著書『補寰宇訪碑錄』は、1812年に刊行された、古代から元代までの、中国全土の石刻目録である孫星衍の『寰宇訪碑錄』の不足を補ったものである。

『六朝別字記』は、魏・齊の石刻の異体字を研究したもの。

これは、趙之謙の、最後に到達した篆書の姿である。縦画は垂直ではなく、だいたい反っている。終筆はぬかずに、筆圧をかけて止めている。点画の黒と分間の白とが響きあっている。独自の「逆入平出」の筆法で書かれている。

『三略』は中国の兵法書である。上略・中略・下略の三略よりなる。この作品には、下略が書かれている。
「夫能扶天下之危者，則據天下之安。能除天下之憂者，則享天下之樂。能救天下之禍者，則得天下之福。」



趙之謙「寒松閣」額字 隷書 款識は楷書 紙本・横披 35.5×136・0 cm 東京国立博物館蔵 制作年不明。



趙之謙「張衡靈憲四屏」の第1幅 1868年（同治7）39歳。紙本、隷書。 120.3×43.3 cm 個人蔵

後漢の張衡の著と伝えられている『靈憲』の一節を、四幅の屏風に書いたもの。この本は天文学と占いの本である。

「太素之先。幽清元靜。寂寞冥默。不可為象。厥中惟靈。厥外惟無。如是者。永久焉。斯以溟滓。蓋乃道之根也。根既建。自無生有。太素始萌。」

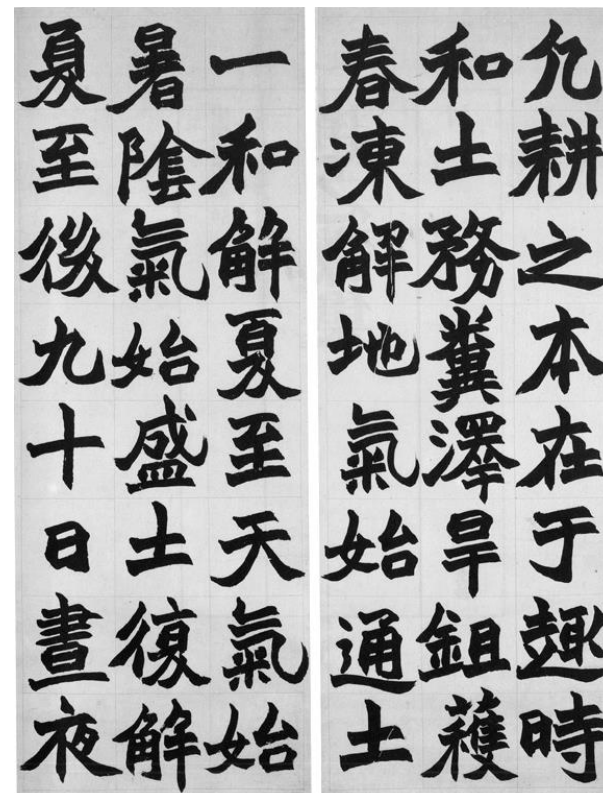
「宇宙の開闢以前は、奥深くもの静かで、寂寞として暗く音もなく、象をなすことができなかった。その中なただ霊、その外はただ無。こんなふうに、永遠の時間があつた。これを溟滓（めいじう）といい、思うにそれが道の根源なのであろう。道の根源が立つと、無より有が生じ、太素が始めて萌す。」（福本雅一氏訳より）

趙之謙は宇宙の根源や天地創造などにたいへん興味を持っていたようで、あまり一般的ではない題材の書をたくさん書いている。この作品もその一つである。何事も徹底して追究しなければすまない性格だったようだ。

このころ、趙之謙は、逆入平出の筆法に熱中していた。思い込みの強い性格なのか、何が何でも逆入で書かねばならないと、かなり無理をして逆押ししている所があらここに現れる。

彼は、逆入中鋒の筆法を通して、宇宙の根源を幻視していたのかもしれない。紙は生紙（朝鮮紙）に書かれているらしい。

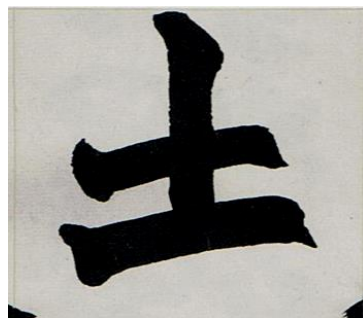
上の額字は、趙之謙とおなじ年の、親しい友人張鳴珂のために、彼の堂号を書いたものである。彼は、たいへん書画を好み、同時代の書画人の略伝を著した。この横披は、結構、布置章法とも完璧である。横額の見本のような作品である。款識は「公東五兄年大人属書 弟趙之謙」・・・「公東」は、張鳴珂の字。



趙之謙「汜勝之書八屏」の第1、2屏 楷書 紙本
1869年（同治8）40歳 100.0×37.5cm 個人蔵

朱糸欄を施した朝鮮紙（生紙・生漉ぎ紙）に書かれている。『齊民要術』に引用される『汜勝之書』の本文180字を友人の孫熹のために書いたもの。汜勝之は前漢代の農業家で、『汜勝之書』は、中国古代の農書である。一般には、このような文章を書家は書かないのだが、常識にとらわれない趙之謙の面目躍如とした作品である。

「北魏書」の記念碑的大作品である。

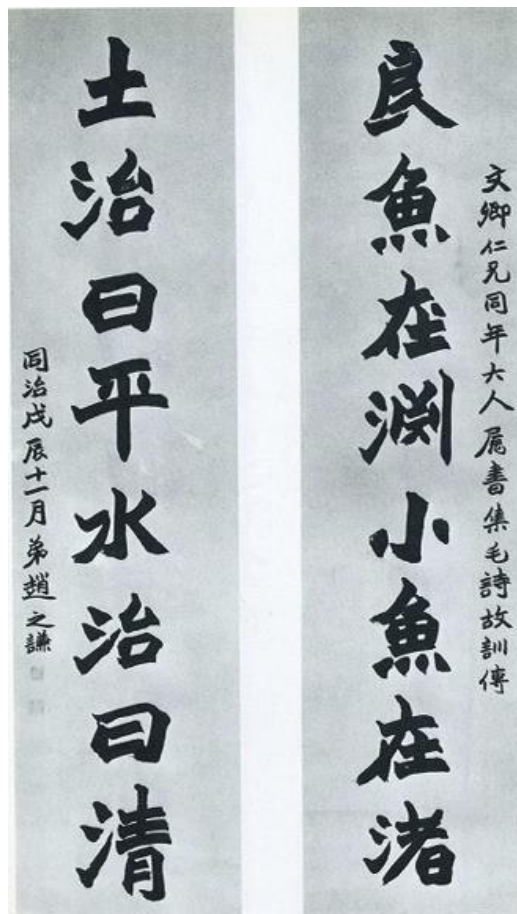


「凡そ耕の本は、時に趣いて土を和し、糞沢に務め、早くすき早く穫するに在り。春凍解け、地氣始めて通じ、土は一に和解す。夏至に天氣始めて暑く、陰氣始めて盛んにして、土は復た解く。夏至後の九十日に、昼夜（分かれ、天地の氣は和す。）」



趙之謙は37歳頃、逆入平出の技法に没頭しだしたという。はじめは、北碑の中でも特に「始平公造像記」からヒントを得たようである。北魏の楷書を徹底的に研究し、やがて、包世臣が理想とした鄭道昭の楷書（篆勢分韻草情ことごとく具わる）を学び、最後に「北魏書」とよばれる独自の書風を確立した。

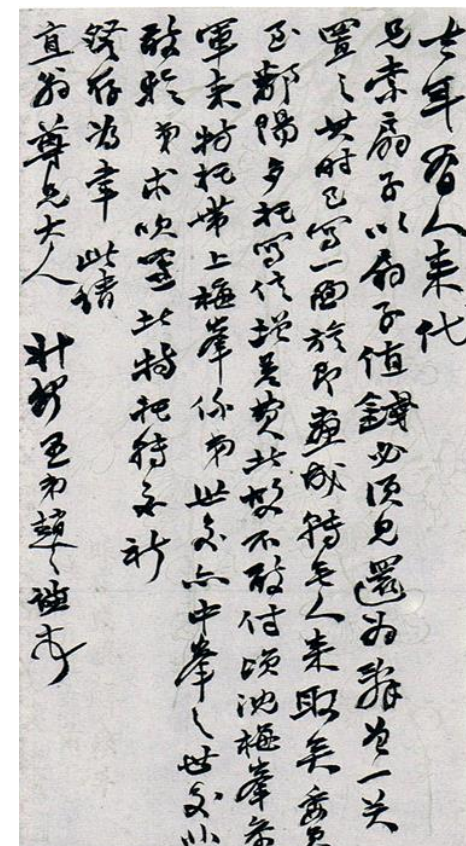
※勢はすがた、韻はリズム、情はあじわい。



趙之謙「良魚在淵對聯」紙本 各 167.2×43.4cm
1868年（同治7）39歳

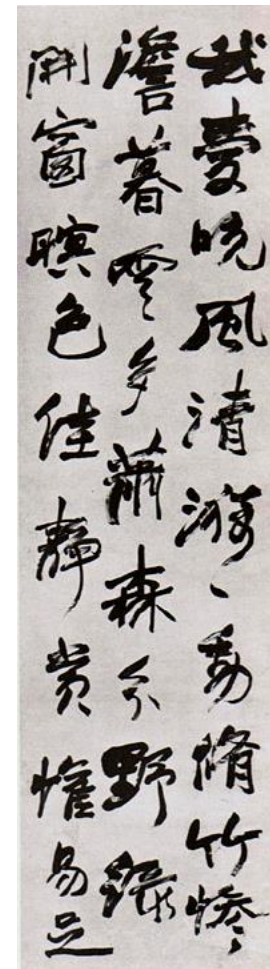
「良魚は淵に在り、小魚は渚に在る。土治まるを、平と曰い、水治まるを、清と曰う。」

友人の文卿のために書いたもの。



趙之謙「尺牘」 東京国立博物館蔵

趙之謙の日常の筆づかいの書。素直な書きぶりの行草である。「去年ある人が来て、兄に代わって扇子を求め、扇子の値が高いので、かならず返されるよう申しましたが、笑っただけでそのままにしておきました。そのときすでに一本を描いていたので、すぐさま描きあげましたが、かえっていつまでも取りに来る人がありますでした。……直翁尊兄大人。叔安。愚弟趙之謙頓首。」



趙之謙「吳鎮詩2首」の第1幅。紙本 149.9×40.9 cm×440 歳前後の制作？

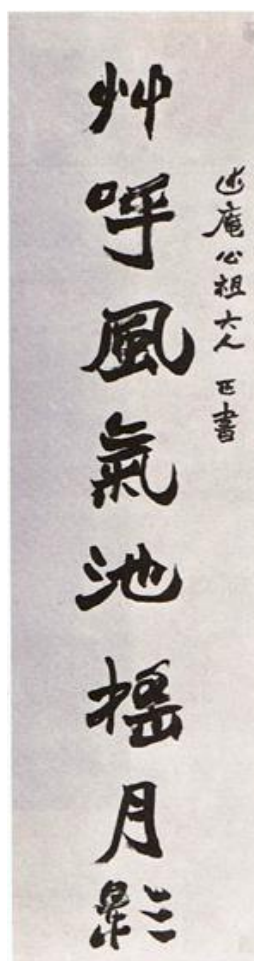
「我愛晚風清。□□動脩竹。慘澹暮雲多。蕭森分野綠。開窓 暝色佳。靜賞 懽易足。」



右の部分



頭の2字は「シ+彡+奇」



述庵公祖大人正書

「草は風氣を呼び、池は月影を揺する。徳は甘露に□く、言は清泉に感ず。述庵公祖大人正書 趙之謙」



趙之謙

趙之謙「草呼風氣對聯」紙本 145×38.7 cm 晩年作？

「草は風氣を呼び、池は月影を揺する。徳は甘露に□く、言は清泉に感ず。述庵公祖大人正書 趙之謙」

絵画

趙之謙は10代から文人画を習い始めた。花卉画を得意とした。海上派の中心人物であった。篆隸の筆法で絵を描いた。徐渭^{じょゑい}の用筆法、墨法や惲寿平^{うんじゅへい}の没骨色彩法、李鱗^{りせん}の構図法と彩色法、鄭燮^{ていしやう}らを模範として倣い、奇抜な構図と胡粉を混ぜる華麗な彩色など、独自の画風を創造した。清末大写意花卉画の開祖といわれる。



趙之謙「宜富当貴図」147.5×57.3 cm
東京国立博物館蔵 牡丹の絵。



趙之謙「四時花卉図」4幅 紙本着色 各 240×60 cm 1870年（同治9）41歳 東京国立博物館蔵



彼の作品の特徴は、知的、作為的。性格は傲慢、奇を衒う、自信家で孤独、客に媚びる、などなど、真実は不明。天才的な技量の持ち主だが、すべてに不満を感じて、鬱鬱と生き、失意と不運のうちに世を去ったという。

詩集に『悲倉居士詩牘』^{ひあんこじしやう}などがある。



康有為 1858年（咸豐8）～1927年（民国16）政治家・学者・思想家・書家

広東省南海県の出身。家は地主。代々学者の家柄。父は江西省の知県。別名を祖詒、字は広厦、号は長素・更生・天游化人・西樵山人・明夷など。居を万木草堂と号した。通称は南海先生。

幼少より教育を受け、宋学を中心に孔子の道を学ぶ。後、陽明学、ヨーロッパの新思潮にもふれ、史学、仏教学、公羊学などを学び、独自の儒教学説を思索し、孔子尊崇運動をした。著書に『新学偽教考』『孔子改制考』『大同書』などがある。彼は、「大同世界」という、一切の苦悩から解放された完全に自由平等な世界を夢みていた。

明治維新を手本として富国強兵・救国済民のために政治変革に奔走した。「戊戌変法」の失敗の後、日本に亡命し、「保皇会」を組織し、光緒帝擁立運動をした。袁世凱とも共同したが分裂し、青島で病死した。

『**広芸舟双楫**』1893年（光緒19）康有為が32歳から書きはじめ35歳のとき刊行された。

包世臣の『芸舟双楫』の説を強調したものと自ら述べている。碑学派の立場から中国の書道史や書の源流、書法論などを述べている。碑学を尊び、帖学を攻撃、「尊魏卑唐」の説である。

金農と鄭燮を碑学派の先駆とし、伊秉綬と鄧石如を開祖としている。鄧石如の篆書と楷書を最高のものと評価。その一部を見てみよう。

『**綴法第21**』より。書法の妙は全く運筆に在り。運筆は呼吸の長短の変化である、それによってリズムが生まれ、筆者の感情が増幅され、生命が躍動してくる。（黄庭堅の「李太白憶旧遊詩卷」などが良い例である）

「方筆」――「高貞碑」「始平公」「楊大眼」など

「円筆」――「石門頌」「鄭文公」「瘞鶴銘」など

「方円両筆」――「爨龍顔碑」「解伯達碑」など

「意在筆前・字居筆後」――「意先筆後」の条件。

「藏法」「逆入逆収」「藏頭護尾」

「横毫側管・豎筆直鋒」

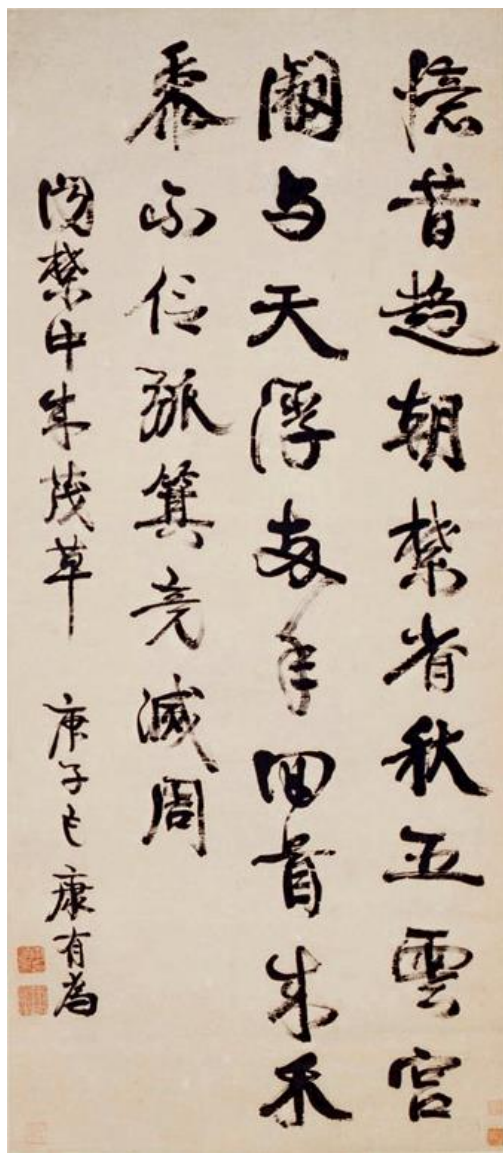
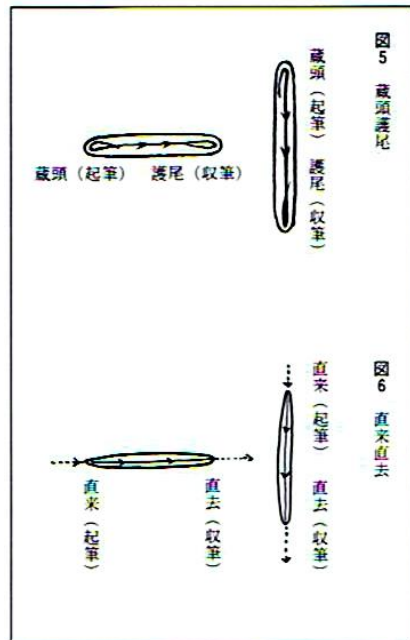
「永字八法」

「書線における骨・筋・肉」

『**学叙第22**』より。書を学ぶ順序。

まず、はじめに筆の持ち方。次に楷書の結構法。つづいて用筆法。

大字から学ぶべし。南北朝代の碑文の楷書の学習によって基礎を固めること。基礎がほぼできたら、黄庭堅の行書や『淳化閣帖』の行書など「帖」も学ぶこと。



康有為「行書七言絶句軸」

134.0×58.6 cm 東京国立博物館蔵



桂馥 1736 (乾隆元) ~ 1804 (嘉慶元)
字は冬卉、号は未谷など。山東省曲阜の出身。
1791年の進士。雲南省永平県の知県。
文字学者、古印研究者、篆刻家、書家。



桂馥「隸書六言聯」紙本 各 128×21 cm
西泠印社蔵



伊秉綬 1754年(乾隆19) ~ 1815年(嘉慶20) 碑学派の先駆者。
字は組似、号は墨卿、南泉、默庵など。福建省寧化の出身。
1789年の進士。広東惠州や揚州の知府を歴任。
書家。篆刻、画、古隸の名手。漢隸への復帰を志した。
劉墉の弟子。波勢のない独特の隸法を創始した。

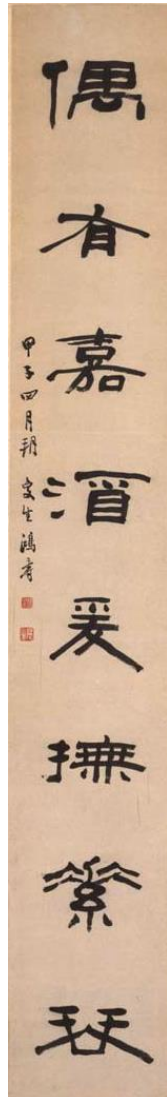
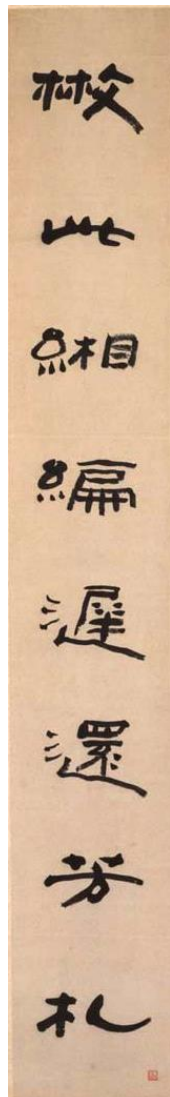


伊秉綬「隸書七言聯」
各 131.2×22.0 cm 東京国立博物館蔵



陳鴻壽 1768年(乾隆33) ~ 1822年(道光2)

字は子恭、号は曼生など。浙江省錢塘の出身。書家、画家、篆刻家。
阮元の書記になったことがある。篆刻は秦漢を学び、丁敬・黃易を宗とした。摩崖の書を好んだ。篆・隸・行草は独創的。「西泠八家」。
晩年、砂壺(朱泥)の「曼生壺」を考案した。



陳鴻壽「隸書八言聯」1804年
各 145×21.7cm 東京国立博物館蔵
波勢を見せない飄逸な風。
開通褒斜道刻石や石門頌を学んだ。



張廉卿「行書七言聯」
東京国立博物館蔵



各 136.1×31.2 cm



張裕釗 1823年(道光3)～1894年(光緒20)
字は廉卿。湖北省武昌の出身。1846年、挙人になり、内閣中書となった。後に曾国藩の幕府に入った。
書法を北魏の「張猛龍碑」「弔比干文」、東魏の「凝禪寺三級浮図碑」、隋の「淳于儉墓誌」に学んだ。日本の宮島詠士は弟子。



楊岷「隸書霓裳逸史四屏」部分
176.7×46.8 cm 東京国立博物館蔵

楊岷 1819年(嘉慶24)～1896年(光緒22) 書家・詩人・金石学家。浙江省帰安(今の湖州)の出身。字は見山、号は季仇、藐翁、鴻熙軒など。1855年(咸豐5)の挙人。金石を好んだ。詩文、隸書が得意。趙之謙や吳大澂らと交流した。吳昌碩は弟子。
太平天国の乱の鎮庄に参加し、上海に滞在中、1862年(44歳のとき)騒乱で二人の息子と姉、兄嫁の肉親を失い、自宅が全焼、次男の鴻熙は行方不明、妻と次女だけが生き残った。官に就いたのも遅く、公私ともに不運な人であった。後に、次男を偲んで鴻熙軒と号した。
59歳で常州府知事になり、65歳で松江府知事になり、翌年辞任、官界を引退して文墨生活にはいった。



陳鴻寿「曼生壺」



陳鴻寿「松宇秋琴」



陳鴻寿「穆生」



陳鴻寿「琴書詩画巢」



陳鴻寿「花卉図」1812年
東京国立博物館蔵



側款「曼生為嘯谷兄作」

徐三庚

1826年(道光6)～1890年(光緒16) 篆刻の名人。浙江省上虞の出身。

字は袖海・辛穀、号は金疊山民・井疊山民など。篆刻は鄧派に学んだ。書は篆隸を得意とした。篆書は呉の「天發神識碑」を学んだ。隸書には金農の筆法をとり入れた。

槐卿仁兄大人屬書印稀一教



徐三庚「六言對聯」

「廣平有梅華賦」「少陵無海棠詩」



「黃山壽印」



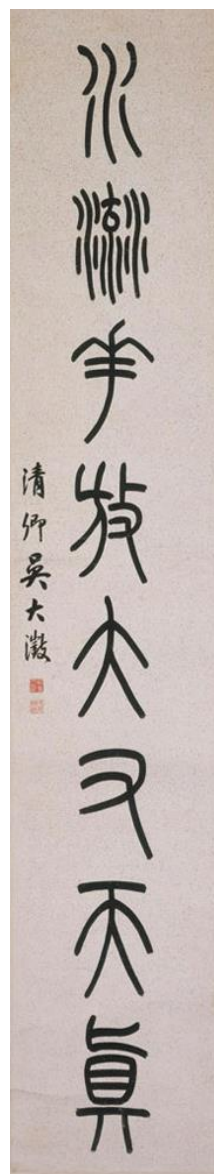
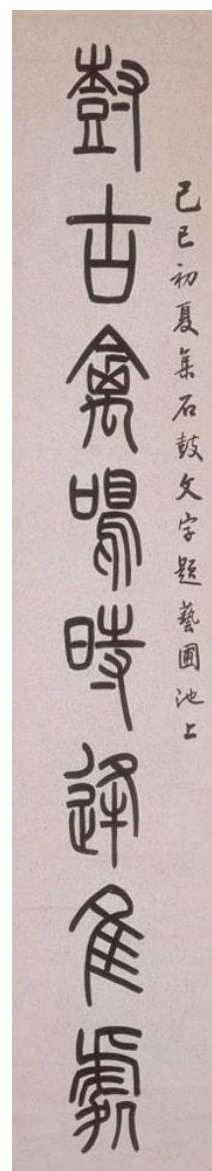
「華長好月長円人長寿」

吳大澂

1835年(道光15)～1902年(光緒28) 金石学者。

字は清卿、号は憲齋など。蘇州の人。1868年の進士。広東巡撫、湖南巡撫に至るが、日清戦争敗戦の責任をとって辞任した。書は篆書・籀文を得意とした。著書『説文古籀補』は文字学の名著である。

己巳初夏集石鼓文字題藝圃池上



吳大澂「篆書八言聯」1869年(同治8)
各 175.5×31.5 cm 東京国立博物館蔵



楊守敬

1839年(道光19)～1915年(民国4) 学者、地理学の権威。能書

字は惺吾、号は鄰蘇。湖北省宜郡の出身。1862年の挙人。金石学に通曉していた。書論に『学書通言』などの著書がある。書は欧陽詢の影響を受けているという。1880年(光緒6) 駐日公使の随員として来日し、4年間滞在。その間、明治日本の書家たちに、碑学を鼓吹し、北魏の楷書を伝えるなど大きな影響を与えた。



楊守敬「行書軸」

「彭沢先生柳、山陰道士驚我来
從所好停策負陰多、重以觀魚樂、
因之鼓枻歌、雀徐跡未朽、千載揖清歌」

以上、代表的な碑学派の何人かについてのべてきたが、このほかにも、楊沂孫などがある。また、帖学派だが、潘存や翁同和なども書の歴史に名を残している。